

中学生の問題行動に関する研究(1)

—ライフイベントの頻度と評価のタイプとの関係性について—

林 幸範

The Study on the Problem Behavior of the Junior High School Students(1)

—On the Relation between the Frequency of Life Events and the Evaluation to them—

HAYASHI Yukinori

This study carries out the survey to the subjects of the junior high school students and the result is the following as:

- ①I obtained 4 types of the frequency of life events and the evaluation to them.
- ②The characteristic of 'the high group' type is 1 degree of the junior high school, boys, the first of three brothers and sisters. It is not to think that there is many friends. It is the one who the time is required to the solution of irritation.
- ③The characteristic of 'the middle group' type is 1 person of parents family or nuclear family, and 2 brothers or sisters. It is bright, aggressive action and to think deeply. It is the one who the time is required to the solution of irritation a little.
- ④The characteristic of 'the low group' type is 3 degrees of the junior high school, girls, over the 2nd child. It is not bright and it is composed, to think deeply.
- ⑤The characteristic of 'the contradiction group' type is 3 generation family and one child. It is the one who the time is not required to the solution of irritation.

Keywords: the Problem Behavior, the Junior High School Students, the Frequency of Life Events, the Evaluation to Life Events, Stress

問題行動、中学生、ライフイベントの頻度と評価、ストレス

1. はじめに

中学生の問題行動が教育関係者の間で問題になり早20年以上となった。その間、校内暴力、いじめ、不登校…と枚挙に暇がない。しかも、そのた

びごとに対策は、現状は、その原因はと語られてきた。主な原因としては、中学生の変質、思春期の特質、家庭教育の変質、地域の教育力の低下、学校の変質、競争化社会、マスコミの影響…など、

様々な点が上げられている。だが、中学生の問題行動の原因は、今だにこれであるという決定打がないのも現状である。さらに、先述したように中学生の問題は、様相を変えながら今だに継続して起こっている。

このような状況から、中学生の問題行動の原因を明確にするため平成10年度以降3年間全国規模調査を実施してきた。

第1回目の平成10年度の調査では、中学生の問題行動の基本であるといわれているストレスを中心に、ストレスと密接な関係性のある中学生の生活をも尋ねた。その結果、特に現在の中学生のストレスについて次のような点が明らかとなった¹⁾²⁾。

①学校、特に勉強がストレスの原因となり、しかもその評価においてもマイナスの評価が多い。

②ストレスの対処法としては、代償的・対症療法的方法が多い。

③不定愁訴、ライフイベントの頻度や評価の因子構造は、ほぼ想定要因が抽出された(図3~4参照)。

④パス解析の結果、ライフイベントの頻度—ストレスが直接的に対処法や不定愁訴などの原因になっていると考えられる。

第2回目の平成11年度の調査では、中学生の問題行動とストレスを中心に、中学生の生活、道徳観・規範意識、心理的・性格的側面などを尋ねた。その結果、特に道徳観・規範意識により抽出された因子分析から求められたタイプなどから次のような点が明らかとなった³⁾⁴⁾。

①『非行親近的タイプ』の中学生は、3年生の男子で、自己概念はプラスに評価する傾向があるが、自分は嫌いであるというアンビバレンツの状態にある。また、自己抑制力や社会的スキルが弱いことなどからも、ストレスに対するトレランスが弱く、ストレスの対処法としては、動物などの弱者にあたるか何もしないという消極的対応法を行っている。

②『道徳的タイプ』の中学生は、1年生の女子で、自己評価はほぼプラスに評価する傾向があり、自分は好きであるが、自己効力は弱い。また、自己抑制力や社会的スキルは、『非行

親近的タイプ』ほどではないが弱い。また、対人ストレスは強いが、ストレスの対処法としては、専門家へ行くなどという積極的対応をとっている。

③『ふつうタイプ』の中学生は、様々な心理的要因があり、ストレスの症状—不定愁訴にも様々あり、そのストレス状態の時の対処法も様々行っている。

④規範意識が低い中学生は社会的スキルも低いなどから社会的スキルとストレスの対応法が関係性が強いといえる。だが、社会的規範が高い中学生でも、社会的スキルが低い傾向があり、現代の中学生は、社会的スキル自体が低くなりつつあるのではないかといえる。

⑤全体的には、特に規範意識が低い中学生や高い中学生では、人間関係性が低いといえる。

第3回目の平成12年度の調査では、前回の2調査を基に中学生・保護者・教員・児童相談所職員・児童自立支援施設職員・児童館職員に実施した。

また、近年のストレス研究から、日常の出来事—ライフイベントがストレスにおいて重要な働きをしており、さらにその出来事をどのように認知し評価するのが重要であるといわれている。

そこで、本研究では、ライフイベントの頻度とその評価を中心に、ストレス関連項目(不定愁訴・ストレス対処法)、及び自己概念、学校に対しての評価(学校へ行くのが楽しいか、学校へ行くのがいやになったか、その時行かなかったか、学校での勉強が好きか)などの関係性について平成10年度「思春期児童のストレス要因の分析とその対応に関する調査研究」厚生省の調査の再分析を実施し、その結果を報告をする。

2. 方法

1) 調査対象

東京都の公立中学校3校、神奈川県公立中学校7校、神奈川県国立大学附属中学校2校、鹿児島県公立中学校1校の計13校及び神奈川県下のK病院内の適応学級の中学生4,366名(1年生:1,494名、2年生:1,348名、3年生:1,524名)を対象。

2) 調査方法

調査方法は、学校を通し各学級で調査票を配布し、記入後回収。回収の際に、必ず記入本人が封筒に調査票を入れ、糊付けをして回収。

3) 調査期間

調査実施期間は、平成10年11月～12月で、調査票回収締め切りは12月20日。

4) 回収状況

本調査の有効回答数は、3,977名で、回収率は91.1%であった。その内訳は、1年生は1,370名(男子716名、女子652名、不明2名)で回収率91.7%、2年生は1,244名(男子621名、女子618名、不明5名)で回収率92.3%、3年生は1,363名(男子718名、女子635名、不明10名)で回収率89.2%であった。

5) 調査票

調査票は、基本的属性(調査対象校、学年・年齢・性別、家族関係)、中学生の生活(地域生活、家庭生活、学校生活)、大人との関係(気持ちを聞いてくれるか、つらい時そばにいて欲しいか、悪いことをした時など叱ってくれるか、自由記述)、中学生の意識とストレス(自己概念(17項目)、不

定愁訴(18項目)、ライフイベントの頻度とその評価(20項目)、ストレスの対処法(17項目)、対処するまでの時間及び人物)などから構成(図1～5の各項目が質問項目)。

6) 分析

ライフイベントの頻度とその評価は、4段階(「よくあった」「いやでなかった」は4点、「時々あった」「あまりいやでなかった」は3点、「ほとんどなかった」「少しいやだった」は2点、「全くなかった」「とてもいやだった」は1点)で評定。学校へ行くのが楽しいかは5段階で評定、学校へ行くのがいやになったか・いやになった時行かなかったかは4段階で評定、学校での勉強は好きかは5段階で評定、自己概念・不定愁訴・ストレスの対応法は4段階で評定。なお、分析では5段階で評定は「肯定」「どちらでもない」「否定」の3段階評定、及び4段階評定は「肯定」「否定」の2段階評定とした。

ライフイベントの頻度とその評価のパターンは、5段階評定の規範意識を因子分析(バリマックス回転)を実施し、抽出された因子を得点化して両者を組み合わせてパターンとした。さらに、ライフイベントの頻度とその評価のパターンとストレスの関係などを明確にするために、数量化Ⅱ類を

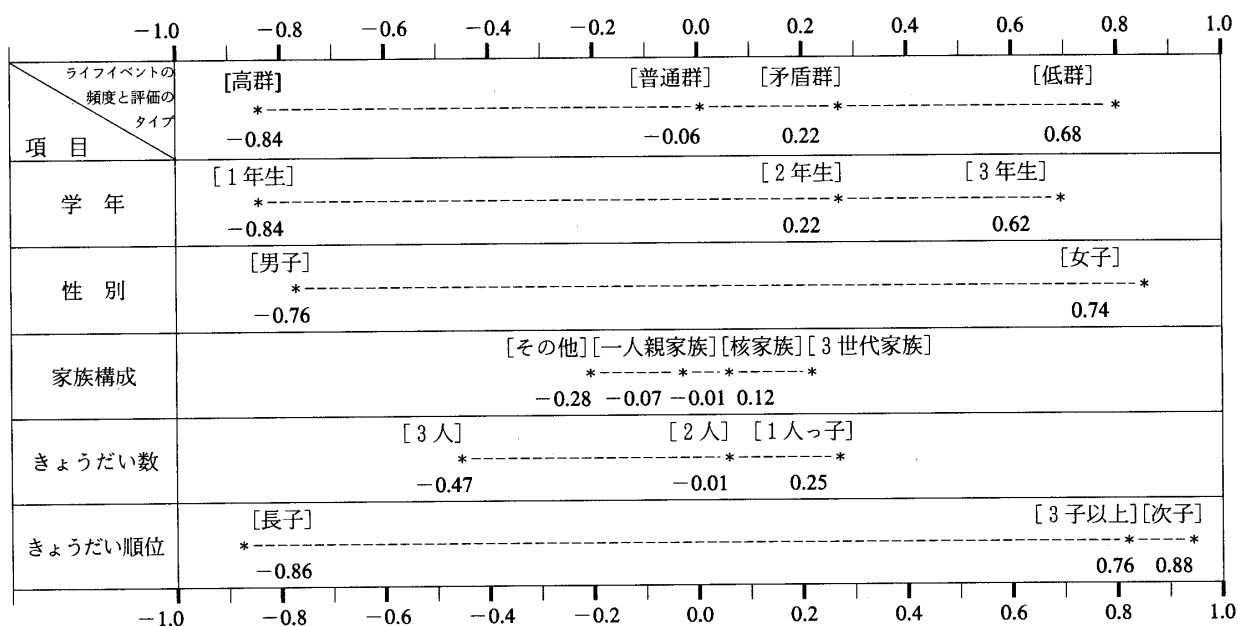


図1 ライフイベントのタイプと属性

表1 学年別・性別のライフイベントの頻度及びその評価のタイプ

		ライフイベントの頻度					ライフイベントに対する評価					総数
		低群	普通群	高群	不明	平均(SD)	いやでない群	普通群	いや群	不明	平均(SD)	
1 年生	男子	207 (28.9%)	258 (36.0%)	155 (21.6%)	96 (13.4%)	43.8 (10.46)	212 (29.6%)	199 (27.8%)	169 (23.6%)	136 (19.0%)	45.9 (13.31)	716 (100.0%)
	女子	181 (27.8%)	222 (34.0%)	174 (26.7%)	75 (11.5%)	45.2 (10.31)	169 (25.9%)	180 (27.6%)	182 (27.9%)	121 (18.6%)	47.9 (13.43)	652 (100.0%)
	計	389 (28.4%)	481 (35.1%)	329 (24.0%)	171 (12.5%)	44.5 (10.41)	381 (27.8%)	379 (27.7%)	352 (25.7%)	258 (18.8%)	46.9 (13.41)	1370 (100.0%)
2 年生	男子	172 (27.7%)	207 (33.3%)	157 (25.3%)	85 (13.7%)	44.8 (11.25)	200 (32.2%)	156 (25.1%)	143 (23.0%)	122 (19.6%)	45.0 (13.73)	621 (100.0%)
	女子	166 (26.9%)	210 (34.0%)	168 (27.2%)	74 (12.0%)	45.0 (9.76)	136 (22.0%)	172 (27.8%)	180 (29.1%)	130 (21.0%)	49.1 (13.0%)	618 (100.0%)
	計	340 (27.3%)	418 (33.6%)	326 (26.2%)	160 (12.9%)	44.9 (10.54)	337 (27.1%)	328 (26.4%)	325 (26.1%)	254 (20.4%)	47.1 (13.56)	1244 (100.0%)
3 年生	男子	185 (25.8%)	250 (34.8%)	200 (27.9%)	83 (11.6%)	45.2 (11.24)	202 (28.1%)	205 (28.6%)	176 (24.5%)	135 (18.8%)	46.8 (13.79)	718 (100.0%)
	女子	159 (25.0%)	254 (39.9%)	172 (27.0%)	51 (8.0%)	45.0 (9.67)	153 (24.1%)	193 (30.3%)	186 (29.2%)	104 (16.4%)	48.8 (12.99)	636 (100.0%)
	計	347 (25.5%)	506 (37.1%)	376 (27.6%)	134 (9.8%)	45.1 (10.58)	360 (26.4%)	400 (29.3%)	363 (26.6%)	240 (17.6%)	47.7 (13.49)	1363 (100.0%)
全 体	男子	564 (27.4%)	715 (34.8%)	512 (24.9%)	264 (12.8%)	44.6 (10.99)	614 (29.9%)	560 (27.3%)	488 (23.7%)	393 (19.1%)	45.9 (13.62)	2055 (100.0%)
	女子	506 (26.5%)	686 (36.0%)	514 (27.0%)	200 (10.5%)	45.1 (9.91)	458 (24.0%)	545 (28.6%)	548 (28.8%)	355 (18.6%)	48.6 (13.17)	1906 (100.0%)
	総計	1076 (27.1%)	1405 (35.3%)	1031 (25.9%)	465 (11.7%)	44.8 (10.51)	1078 (27.1%)	1107 (27.8%)	1040 (26.2%)	752 (18.9%)	47.2 (13.49)	3977 (100.0%)

注) 1) 上段の整数は回答数、()内の小数は「総数」を母数とした%
 2) 平均は、「不明」を除いた平均、及び()内の数字はSD
 3) は、各群で10.0ポイント以上の差があった項目のうち最も高い%
 4) 「不明」は除く

実施した。

3. 結果と考察

1) ライフイベントの頻度とその評価のタイプ

① ライフイベントの頻度のタイプ及びその評価のタイプ(表1参照)

ライフイベントの頻度とライフイベントに対する評価の各項目の得点を合計し、T得点化し、ライフイベントの頻度の得点の上位群を「高群」、得点の低位群を「低群」、得点の中位群を「普通群」とし、ライフイベントに対する評価の得点の上位群を「いや群」、得点の低位群を「いやでない群」、得点の中位群を「普通群」とした。これらの群のタイプを学年別・性別にみた結果が、表1である。

この結果から、ライフイベントの頻度のタイプの割合は、「低群」が27.1%、「普通群」が35.3%、「高群」が25.9%である。ライフイベントに対する評価のタイプの割合は、「いやでない群」が

27.1%、「普通群」が27.8%、「いや群」が26.2%である。また、ライフイベントの頻度のタイプは『普通群』の割合が高い傾向がある。ライフイベントに対する評価のタイプでは、「男子」には『いやでない群』が高い傾向があり、「女子」には『いや群』が高い傾向がみられる。

② ライフイベントの頻度とライフイベントに対する評価の関係

ライフイベントの頻度とライフイベントに対する評価の関係をみてみると、頻度が『低群』で評価が『いやでない群』が721名(18.1% : 3,977名に対する%)で最も割合が高く、次いで頻度が『普通群』で評価が『普通群』が682名(17.1%)、頻度が『高群』で評価が『いや群』が586名(14.7%)、頻度が『高群』で評価が『普通群』が301名(7.6%)、頻度が『普通群』で評価が『いや群』が297名(7.5%)、頻度が『普通群』で評価が『いやでない群』が291名(7.3%)、頻度が『低群』で評価が『いや群』が147名(3.7%)、頻度が『低群』で

表2 学年・性別のライフイベントのタイプ

		高群	普通群	低群	矛盾群	その他	不明	総数
1年生	男子	81 (11.3%)	121 (16.9%)	143 (20.0%)	40 (5.6%)	188 (26.3%)	143 (20.0%)	716 (100.0%)
	女子	113 (17.3%)	120 (18.4%)	125 (19.2%)	24 (3.7%)	147 (22.5%)	123 (18.9%)	652 (100.0%)
	計	194 (14.2%)	241 (17.6%)	268 (19.6%)	65 (4.7%)	335 (24.5%)	267 (19.5%)	1370 (100.0%)
2年生	男子	75 (12.1%)	85 (13.7%)	124 (20.0%)	37 (6.0%)	173 (27.9%)	127 (20.5%)	621 (100.0%)
	女子	109 (17.6%)	110 (17.8%)	100 (16.2%)	29 (4.7%)	139 (22.5%)	131 (21.2%)	618 (100.0%)
	計	185 (14.9%)	195 (15.7%)	225 (18.1%)	66 (5.3%)	313 (25.2%)	260 (20.9%)	1244 (100.0%)
3年生	男子	98 (13.6%)	111 (15.5%)	123 (17.1%)	37 (5.2%)	203 (28.3%)	146 (20.3%)	718 (100.0%)
	女子	109 (17.1%)	134 (21.1%)	103 (16.2%)	32 (5.0%)	150 (23.6%)	108 (17.0%)	636 (100.0%)
	計	207 (15.2%)	246 (18.0%)	228 (16.7%)	72 (5.3%)	355 (26.0%)	255 (18.7%)	1363 (100.0%)
全体	男子	254 (12.4%)	317 (15.4%)	390 (19.0%)	114 (5.5%)	564 (27.4%)	416 (20.2%)	2055 (100.0%)
	女子	331 (17.4%)	364 (19.1%)	328 (17.2%)	85 (4.5%)	436 (22.9%)	362 (19.0%)	1906 (100.0%)
	総計	586 (14.7%)	682 (17.1%)	721 (18.1%)	203 (5.1%)	1003 (25.2%)	782 (19.7%)	3977 (100.0%)

注) 1) 上段の整数は回答数、()内の小数は「総数」を母数とした%
 2) 「不明」は除く

評価が『普通群』が114名(2.9%)、頻度が『高群』で評価が『いやでない群』が56名(1.4%)などの順である。

これらのことから、ライフイベントの頻度は、学年・性別を問わず『普通群』が多いが、ライフイベントに対する評価では、1年生と2年生は男子では『いやでない群』が、女子では『いや群』が多い傾向があり、3年生では男女とも『普通群』が多い傾向がある。また、頻度と評価との関係では、『低群』『いやでない群』、『普通群』『普通群』、『高群』『いや群』の3群で過半数を超えている。
 ③ ライフイベントのタイプの学年別・性別 (表2参照)

ところで、頻度が『低群』で評価が『いやでない群』、頻度が『高群』で評価が『いや群』というのは、ストレス頻度が低ければ評価は低くなり、頻度が高くなれば評価が高くなることから、ストレスの反応として適応的な反応と考えられる。それに反して、頻度が『低群』で評価が『いや群』は、ストレスになる出来事がそれほどないのに、評価がいやと言うことからズレが非常に高い群と言えよう。また逆の関係ではあるが、頻度が『高

群』で評価が『いやでない群』も、ストレスになる出来事が多いのに、評価がいやでないということからズレが非常に高い群と言えよう。

そこで、この関係性に注目して、ライフイベントのタイプを作成した。そのタイプとは、頻度が『低群』で評価が『いやでない群』を『低群』タイプ、頻度が『高群』で評価が『いや群』を『高群』タイプ、頻度が『普通群』で評価が『普通群』を『普通群』タイプ、頻度が『低群』で評価が『いや群』と頻度が『高群』で評価が『いやでない群』は頻度と評価の関係に矛盾が存在するので『矛盾群』タイプ、それ以外のものを『その他』群タイプとした。

このライフイベントタイプと学年・性別との関係を示したのが、表2である。

その結果より、各学年・性別とも『その他』群が最も割合が高い。だが『その他』群を除くと、1年生では男女とも『低群』が、2年生・3年生では男子が『低群』、女子が『普通群』が割合が高い傾向がある。

各群ごとに学年別にみると、『高群』では「1年生」が33.1%(全体の「総計」を母数にした

%)、「2年生」が31.6%、「3年生」が35.3%であり、『普通群』では「1年生」35.3%、「2年生」28.6%、「3年生」36.1%であり、『低群』では「1年生」37.2%、「2年生」31.2%、「3年生」31.6%であり、『矛盾群』では「1年生」32.0%、「2年生」32.5%、「3年生」35.5%である。また、性別をみると、『高群』では「男子」が43.3%、「女子」が56.8%であり、『普通群』では「男子」が46.5%、「女子」が53.4%であり、『低群』では「男子」が54.1%、「女子」が45.5%であり、『矛盾群』では「男子」が56.1%、「女子」が41.9%である。

これらのことから、各学年・性別とも『その他』群が最も高い。また、各群ごとに性別をみると男子は『矛盾群』が、女子は『高群』の割合が最も高い。

2) ライフイベントのタイプとの関係

ライフイベントのタイプとして5タイプあるが、『低群』タイプ、『高群』タイプ、『普通群』タイプ、『矛盾群』タイプの4タイプで分析を試みた。

① 属性との関係(図1参照)

図1は、ライフイベントのタイプと属性との数量化Ⅱ類の分析の結果である。

この結果から、『高群』タイプでは、1年生で男子、その他の家族で、3人きょうだいでなおかつ長子であるという特徴が、『普通群』タイプで

は、一人親家族か核家族、きょうだいは2人という特徴が、『矛盾群』タイプでは、3世代家族で、1人っ子という特徴が、『低群』タイプでは、3年生で女子、次子以上という特徴がある。

② 学校に対する評価の関係(図2参照)

図2は、ライフイベントのタイプと学校に対する評価との数量化Ⅱ類の分析の結果である。

この結果から、『高群』タイプでは、学校へ行くのが楽しく、学校へ行くのがいやになることがよくあるという特徴が、『普通群』タイプでは、学校へ行くのがいやになった時行かなかったことがあまりなく、学校で勉強をするのが嫌いという特徴が、『矛盾群』タイプでは、学校へ行くのが楽しいかどうかどちらでもなく、学校へ行くのがいやになったことがなく、学校で勉強するのが好きという特徴が、『低群』タイプでは、学校へ行くのがつまらないという特徴がある。

③ 自己概念との関係(図3参照)

図3は、ライフイベントのタイプと自己概念との数量化Ⅱ類の分析の結果である。

この結果から、『高群』タイプでは、友だちが多いとは思わないという特徴が、『普通群』タイプでは、明るいと思い、人をよく笑わせるかどうかはどちらでもなく、行動力があると思う、しっかりしているとは思わない、みんなから信頼されているかどうかはどちらでもない、がんばりやで

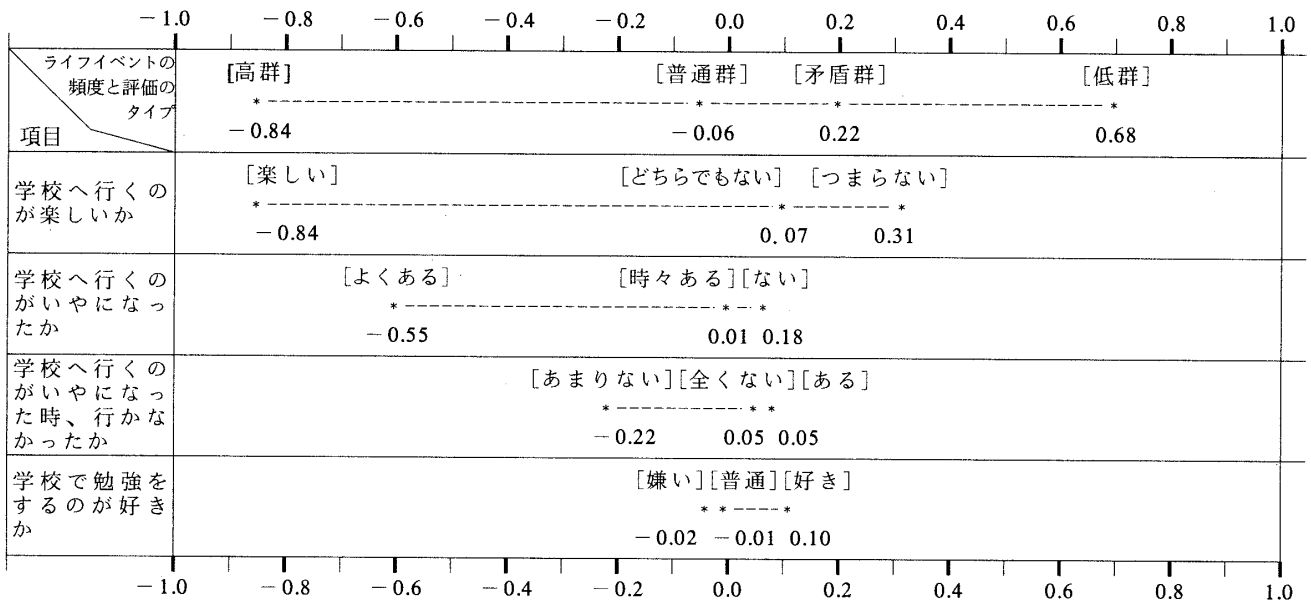


図2 ライフイベントのタイプと学校に対する評価

あるかどうかはどちらでもなく、落ち着いているかどうかはどちらでもなく、ものごとを深く考えると思うという特徴が、『矛盾群』タイプでは、明るいとは思わない、落ち着いていると思う、ものごとを深く考えると思うという特徴がある。

④不定愁訴との関係 (図4参照)

図4は、ライフイベントのタイプと不定愁訴との数量化Ⅱ類の分析の結果である。

この結果から、『普通群』タイプでは、ねむいということではなく、大声を出したり、思いっきりあばれまわりたい、横になって休みたい、何にもやる気がしない、イライラし、根気がなくなり、考えがまとまらず、頭が重くぼんやりし、おなかが痛く、人と話すのがいやだという特徴が、『矛盾群』タイプでは、大声を出したり、思いっきりあばれまわりたいということではなく、横になって休みたいということではなく、イライラすることもなく、考えがまとまらないということもないという特徴がある。

⑤ストレス対処法との関係 (図5)

図5は、ライフイベントのタイプとストレス対処法との数量化Ⅱ類の分析の結果である。

この結果から、『高群』タイプでは、イライラした時に解消するまでに時間がかかる方という特徴が、『普通群』タイプでは、ストレスを感じたときに、趣味や好きなことはせず、運動やスポーツはやり、買い物へ行き、どうにでもなれと思ひ、友だちに話し、感じないようにし、イライラした時に解消するまでに少し時間がかかるという特徴が、『矛盾群』タイプでは、運動やスポーツはやらす、どうにでもなれと思わず、ものや動物に当たらず、人にあたることもしないし、イライラした時に解消するまでに時間がかからないという特徴が、『低群』タイプでは、イライラした時に解消するまでに時間がかかるかどうかかわからないという特徴がある。

4. 結語

数量化Ⅱ類の結果から、ライフイベントのタイプの特徴は以下の通りである。

①『高群』タイプでは、1年生で男子、その他

の家族形態で、3人きょうだいでなおかつ長子であり、学校へ行くのが楽しく、その割反面学校へ行くのがいやになることがよくある。自分では、友だちが多いとは思わない。イライラした時に解消するまでには時間がかかる方である。

②『普通群』タイプでは、一人親家族か核家族、きょうだいは2人、学校へ行くのがいやになった時に行かなかったことがあまりなく、学校で勉強をするのが嫌いという。自分では、明るく、行動力があり、ものごとを深く考える方だと思ひが、しっかりしているとは思わない、人をよく笑わせるか、みんなから信頼されているか、がんばりやであるか、落ち着いているかどうかはどちらでもない。ねむいということではなく、大声を出したり、思いっきりあばれまわりたい、横になって休みたい、何にもやる気がしない、イライラし、根気がなくなり、考えがまとまらず、頭が重くぼんやりし、おなかが痛く、人と話すのがいやだという。ストレスを感じたときに、趣味や好きなことはしないが、運動やスポーツはやり、買い物へ行き、どうにでもなれと思ひ、友だちに話し、感じないようにしている。イライラした時に解消するまでに少し時間がかかる方である。

③『矛盾群』タイプでは、3世代家族で、1人っ子、学校へ行くのが楽しいか楽しくないということはどうかどちらでもなく、学校へ行くのがいやになったことがなく、学校で勉強するのが好き。自分では、大声を出したり、思いっきりあばれまわりたい、横になって休みたい、イライラすることもなく、考えがまとまらないということもない。運動やスポーツはやらす、どうにでもなれと思わず、ものや動物に当たらず、人にあたることもしない。イライラした時に解消するまでには、時間がかからない

④『低群』タイプでは、3年生で女子、次子以上、学校へ行くのがつまらないという特徴がある。自分を明るいとは思わない、落ち着いていると思ひ、ものごとを深く考えると思ひ。イライラした時に解消するまでには時間がかかるかどうかかわからない。

これらのことから、特に『普通群』では、様々

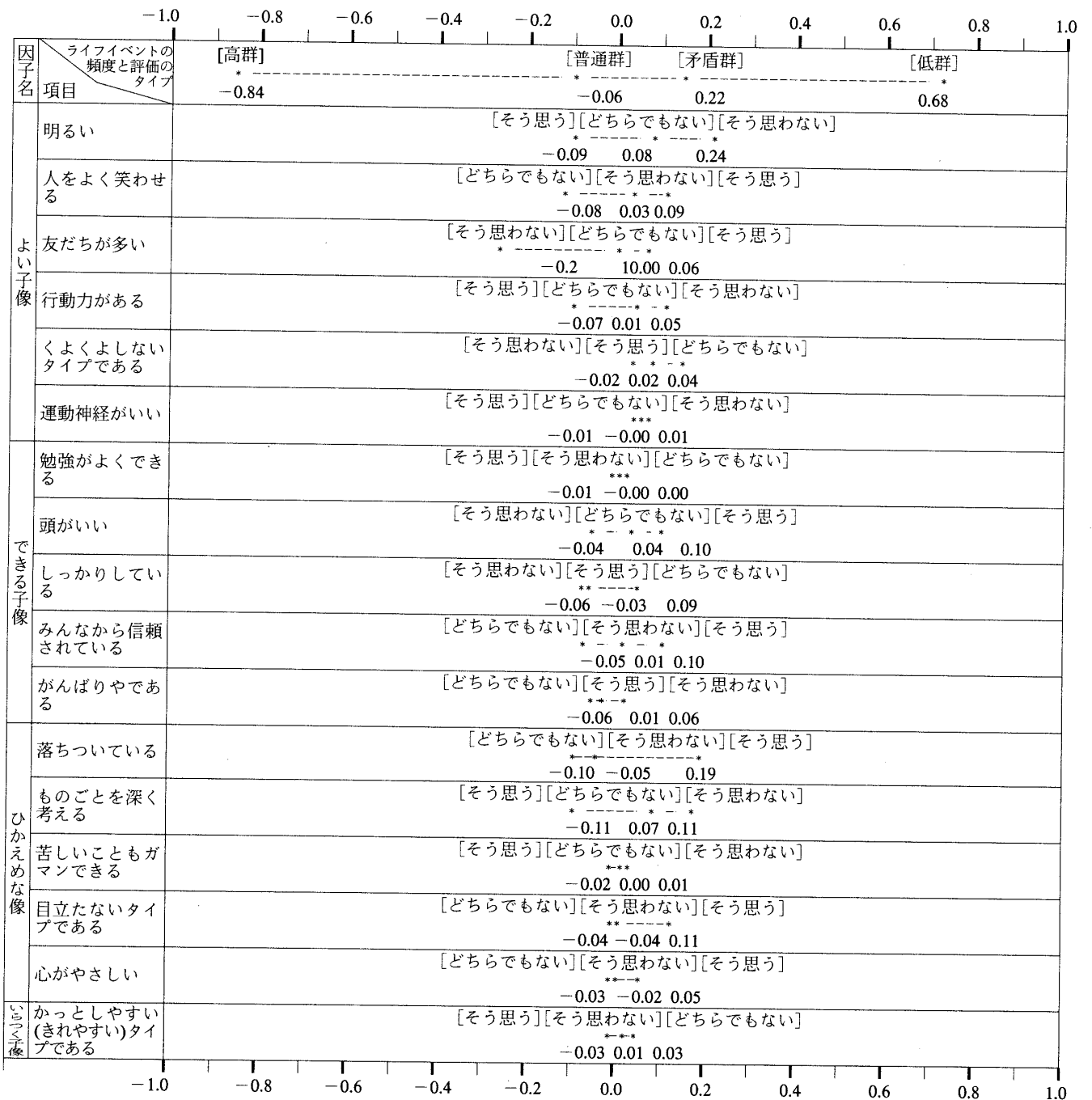


図3 ライフイベントのタイプと自己概念

なストレスに曝され、それを処理していくそのために、項目が多くなったようである。ところで『矛盾群』であるが、学校に対する考え方などにも多くの矛盾をかかえており、また、ストレスの状況にあっても対応ができていくという傾向がみられる。

以上のことから、今後の問題点としては、①中学生の生活構造との関連性、②広範なストレス意識の解析、③規範意識と心理的要因・ストレス・

社会的要因などとの構造の明確化などがあげられる。

[謝辞] 調査にご協力をして下さった学校関係者の皆様には紙面を借りてお礼を申し上げます。

[引用文献]

1) 「思春期児童のストレス要因の分析とその対

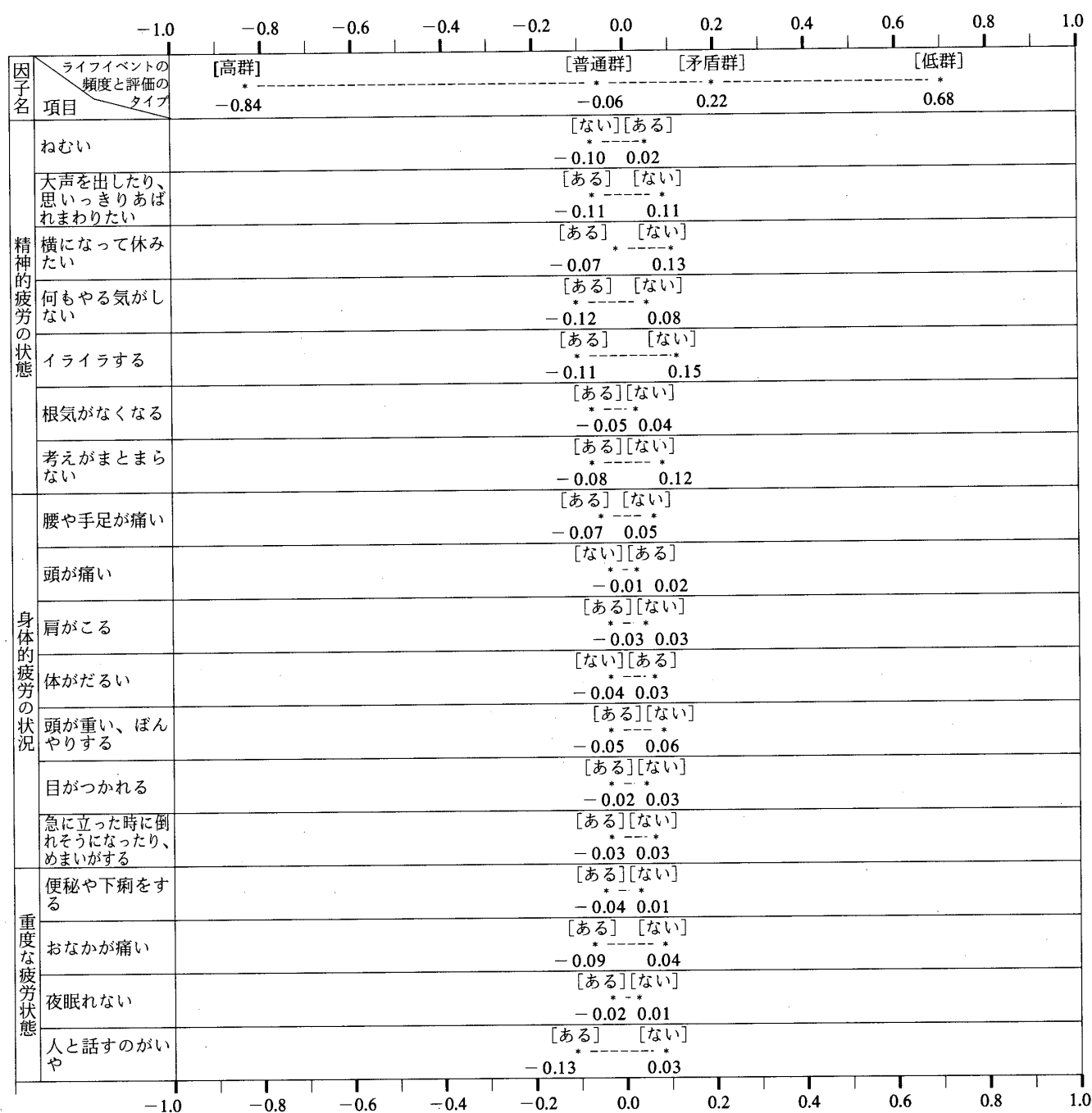


図4 ライフイベントのタイプと不定愁訴

- 応に関する調査研究」平成10年度児童環境づくり等総合調査研究事業研究報告書，厚生省
- 2) 林幸範「中学生のストレスに関する研究—ストレスの構造を中心にして—」児童研究、78：11-23、1999
- 3) 「中学生の問題行動の背景にある心理・社会的要因に関する研究」平成11年度 児童環境づくり等総合調査研究事業研究報告書，厚生省
- 4) 林幸範「中学生の問題行動に関する研究—規

範意識のタイプと心理的要因及びストレスとの関係—」児童育成研究、19：2-14、2001

要旨

この研究は、中学生を対象に調査を実施し、次のような結論が得られた。

- ① ライフイベントの頻度とライフイベントに対する評価とから、ライフイベントの4タイプを得

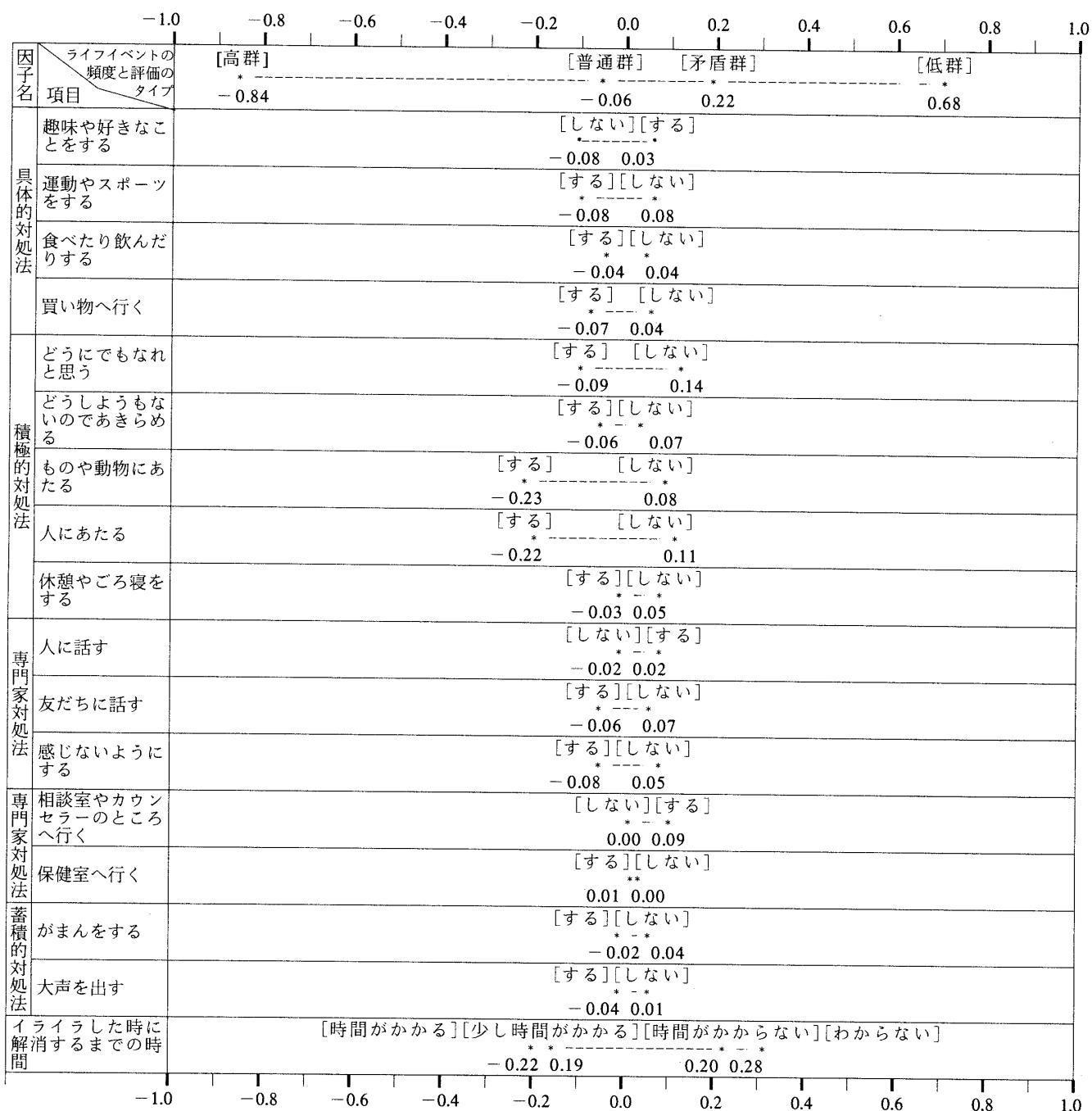


図5 ライフイベントのタイプとストレス対処法

- た。
- ② 『高群』タイプの特徴は、1年生で男子、3人きょうだいの長子である。自分は友だちが多い方とは思わない。イライラの解消には、時間がかかる方である。
 - ③ 『普通群』タイプの特徴は、一人親家族か核家族、きょうだいは2人である。自分で、明るく、行動力があり、ものごとを深く考える方だと思っている。不定愁訴の項目はタイプ中最も多い。イ

- ライラの解消には、少し時間がかかる方である。
- ④ 『低群』タイプの特徴は、3年生で女子、次子以上である。自分は、明るい方ではないが、その反面落ち着いており、ものごとを深く考える方だと思う。
- ⑤ 『矛盾群』タイプの特徴は、3世代家族で、1人っ子である。イライラの解消には、時間がかからない。

(2003. 10. 31. 受稿)